遅れ馳せながら仏教を思う

名誉会員・海事補佐人　田中善治

世界中には様々な宗教があり、それぞれの信者毎に組織化してこの世を動かしているようだ。宗教を理解せずして世界は語れないと言われる所以であろう。　特に最近の国際的な暴力行為はそれが顕著である。私のほぼ２０年近い船員生活で約５５か国の港に寄港した。外国航路の船員にとって厄介なことは、寄港地毎に民族、言語、政治体制、度量衡、通貨などが異なっていて、それにこちらが合わせなければならないことである。中でも気を遣うのは宗教だった。

アメリカやオーストラリアなどクリスチャンが多い港に入ると信者が訪船してシーメンズクラブやチャーチなどに誘った。でも宗教行事はなく、長い航海を労ってケーキとコーヒーでもてなしを受け、ビリヤードやダーツなどで遊ぶ程度だった。インドや中東方面では、人一倍強い信仰心を持っているのか、自分の信じる宗教を仕事そっちのけで熱心に説く者もいて辟易することもあった。

日本人というよりも、東洋人は皆ブッディストだと思い込んでいる多くの人々は、仏教とはどんなものかと好奇の目で見ると同時に、自分たちの信じているものよりも劣っている筈だ、という考えで接して来るものがほとんどだった。そのような者に対して、その地の言語での会話力もなく、どう対応すべきか、という以前に、そもそも、仏教について何も知らないということの方に引け目を感じて、情けなくも相手の言い分にただ頷くだけだった。

宗教に頼らなくても不都合なく生きていける、というのが今の日本人の大方の考えであろう。宗教論争など我が国には馴染まないと思っているに違いない。そう思いながらも先祖の供養を仏教儀式に求めているのは何故か・・・。先祖代々続いている習慣だから、との返答を是認するには、いとも浅はかに深遠な先祖の心性を否定していいのか、と再度問いたくもなる。

私自身、実家の宗派も知らずに大人になった。海上生活で色々なジャンルの本を読む機会があったが、仏教についての普遍的なもの、たとえばキリスト教における新約聖書やイスラムのコーランといった身近にあっていつでも手に取れるような解説書にお目にかかったことがない。いつか仏教について調べてみたいと思いながら月日は過ぎた。

８年前の春、不意に何かを学んでみたいという気持ちが湧いた。たまたま早稲田大学卒業の友人にそのことを漏らしたら、同大学のオープンカレッジはどうかと勧めてくれた。言われるままに問い合わせてみると、折り返し公開講座を詳細に説明したカタログが届いた。その中に個々の宗教を解説するものや、歴史と歴史上の人物から読み解く世界の宗教史、或いは、比較宗教学の立場から世界の宗教を分析するものなどがあった。そのほとんどに関心をもったが、無理のない範囲で週一日、三講座、規定の単位取得まで６年と決めて講座を選んだ。一日中宗教漬けになるのもどうかと思い、「日中交流史」とか「暦の歴史」なども織り交ぜた。受講料、交通費も然ることながら、自宅久里浜から早稲田まで２時間15分、容易ではなかった。

受講してみて先ず思ったのは、当然の事ではあるが、無礼を承知で言えば内容の質、量ともに濃厚な講義であった。このような講義を大学生は４年間も毎日受講していることへの驚きと羨みだった。高卒の自分にとっては経験したことのない別次元の場に足を踏み入れてしまったという戸惑いを感じた。

でも、やるからには悔いのないものにしようとの思いと、毎回の講義が待ち遠しいほど興味深いものだったことが継続のエネルギーとなった。

平成２５年４月５日、当初の予定通り規定の単位を取得し、大隈講堂で鎌田　薫総長よりオープンカレッジ修了証書を受領した。一緒に修了したのは 105 名だった。その後も受講を継続している。

翌２６年春、町内の有志の発起により「写経の会」がスタートした。きっかけは建て替えたばかりの我が家を妻の友人が見て回っていて、たまたま写経したものを見つけたことだった。私は全くその気はなかったが会の代表にされてしまった。月１回、自治会館に 10 名程集まって般若心経を写経している。しかし、その意味を分からずに書いているよりも、少しでもいいから意味を知った方が充実できると思った。そこで恩師である早稲田大学の長谷川名誉教授のお許しを得て、私が理解している範囲内で解説することとなった。

仏教界では馴染み深い般若心経（般若心経を経典として認めていない宗派もある）。玄奘三蔵法師訳が伝えられたと言われる漢字 276 文字、これに限らず一般の人にとって経典を一読しただけで理解するのは不可能である。なぜならば、現在ほとんど使われなくなったマガダ語、パーリ語、梵語などで書かれたものを漢字に訳す際玄奘は「五種不翻」を基準としたからである。

１、 微妙深隠な言葉は訳せないから訳さない

２、 一語の中に複数の意味があり訳せない場合がある

３、 中国にないものは訳しようがないので音写しておく

４、 訳せないわけではないが、昔から梵音のままにしてあるものは訳さない

５、 訳してしまうと浅薄になる語句は訳さないほうが良い

（「般若心経はなぜ人を癒すのか」長谷川洋三著　木耳社　47,227 頁）

幸い我々は表意文字である漢字を使用しているので、字面を見て何となく解るような気になる。とは言え、２７６文字の中に「無」21 回、「不」９回、「空」７回と、否定や虚無をあらわす字が多く出てくる。般若心経は読む人によって夫々解釈が違うと言われる一因になっているようだ。そのうち私の解釈を書いてみようと思う。

本年３月２日、継母が９４歳で亡くなった。出棺の朝、菩提寺の導師が来られる前に、喪主である兄の同意の下に読誦した。パーリ語の「礼拝」「三帰依」に始まり「開経偈」に続いて「摩訶般若波羅蜜多心経」と「延命十句観音経」を唱えた。出棺に立ち会うために集まっていた身内、親戚約３０名はこれに違和感をもち、何か異変でも起きるのかと受け取ったようだ。

仏教経典は人類が生きるための規範を解いたもので、勿論お坊さんの専有物ではない。近年の商業仏教と化した現状を思うと、経典はおろか仏教それ自体さえも遠い存在となってしまったようで残念である。

（平成２７年３月１８日）